

えつとええもん すぐれもん

「すぐれもの」には技がある。

福山が国内外に誇る「すぐれもん」は、さまざまな伝統技術を継承する「すぐれもん」たちによって生み出されます。



豊田泰久さん(松永下駄工房)

【松永下駄】

「下駄の町・松永」の名を守っていくために。

日本一の下駄の産地として知られる松永。早くも大正時代には機械化が進み、最盛期には何百軒という下駄屋が軒を並べていたといえます。松永下駄工房の豊田泰久さんは、この町で90年以上続く下駄屋の4代目。「粹で、素肌に優しい下駄は日本の風土にいちばん合う履物」と豊田さん。松永で作られること下駄文化を伝えていきたいと、一本一本丁寧に鼻緒をすけています。



来山淳平さん(中継表 手織り職人)

【びんご畳表】

自作の織機で、中継表の伝統を織る。

高級畳表の代名詞ともいわれる「びんご畳表」。中でも最高級品とも幻ともいわれるのが中継表です。1600年頃に考案されたという手織りの技法を継承するのは、今では来山淳平さんただ一人。通常より短い1.5倍前後の草2本を真ん中で継ぎ合わせていく作業は、1日がかかりで1畳が精一杯。根気よく全身の力を込めて強く打ち込むことで、手織りならではの厚みがあるふっくらとした畳表に仕上がります。

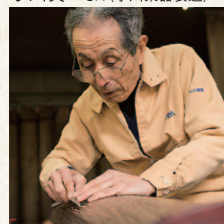


【福山琴】

経験を積み、感覚を磨き「つひとつ違う木と向き合う」。

楽器として初めて国の伝統工芸品に指定された福山琴。小川楽器製造の小川賢三さんは、18歳で父と同じ琴職人の道を志して60年余り。「福山琴の魅力は一つひとつ違う桐の木目の美しさと優れた音色にある」と言います。原木の桐選びに始まり、製材を野ざらしの天然乾燥で1〜2年。そして形を作り上げるのに1カ月。ひとつとして同じ仕上がりになることはなく「大切なのは、手先の器用さよりも職人の知恵」と小川さん。「鳴りすぎず、響きすぎないシンパルな琴を今なお探求し続けています」。

小川賢三さん(小川楽器製造)



備後かすり学習会の皆さん



昭和初期の手織り

【備後絰】

かけた手間ひまが木綿と藍の素朴な風合いを生む。

江戸末期に若田町で誕生した備後絰。家庭での手織りから機械化が進み、昭和30年代には国内シェア70%を占める福山の主要産業へと発展しました。備後かすり学習会の皆さんが、技術の保存・伝承に取り組んでいます。反物が出来るまでの工程は20以上。経験を積み重ね、昔の人の技術と感性に驚かされるそうです。「昔の人が織った絰模様、いつか到達したい」と会員同士で技術を高め合っています。



枝廣将哉さん(カイハラ)

【デニム】

世界が認めたブルーデニムは情熱で作られる。

日本三大絰の産地として知られる新市町。カイハラは1893年、藍染絰の製造会社として創業しました。今や世界のトップメーカーが注目するブルーデニムは、伝統の「染め」の技術と多様な藍色(インディゴブルー)を知る人たちの手で生み出されました。「手が込んで生み出されました」という創業からの情熱で、新商品を次々と開発。ものづくりの現場は、面白さとやりがいにあふれています。



ボリ飲料充填機●一度は口にしたことがある「チューチュー」。その容器にこぼさず充填する機械。



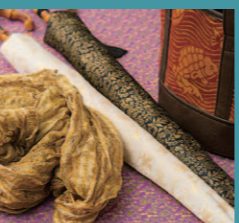
滑り止め手袋●工事や作業時に手元の安全を守る手袋。カラフルなデザインで選択肢も幅広い。



緊急トイレセット●排泄物をゼリー状に固める。殺菌、消臭効果に優れた簡単便利な箱型。



シャックル●鍛冶の技術をベースに独自の創意工夫を施した重量物を吊り上げる吊り金具。



金襴●世界でも日本でしかできない技術で、金の平箔や金糸で模様を織り上げた織物。



美容・化粧品アクアテド●物を錆びさせない最先端水素水の応用から生まれた化粧水。



ティーパック式だしの素●かつおや昆布、しいたけなどをバランスよく配合した手軽な天然だし。



かき醤油●本醸造醤油に広島産カキのうまみエキスと調味料を加えた新感覚の味わい。



フリーズドライ●お湯をかけるだけ。具だくさんのみそ汁やどんぶりの素など種類豊富。

まだまだあります
福山の
すぐれもん